

琉球大学学術リポジトリ

Mirabellとその喜劇的役割

メタデータ	言語: 出版者: 琉球大学法文学部 公開日: 2010-10-12 キーワード (Ja): キーワード (En): 作成者: 吉村, 清, Yoshimura, Kiyoshi メールアドレス: 所属:
URL	http://hdl.handle.net/20.500.12000/18212

Mirabell とその喜劇的役割

吉 村 清

William Congreve (1670—1729) の *The Way of the World* (1700) は舞台がロンドンの上流社交界であること、複雑な男女関係がモチーフとなっていること、会話が機智に富んでいることなどの点で comedy of manners (風俗喜劇) の特徴をよく現出している一典型と評価することができよう。

Congreve は劇中人物を男と女に分け、愛や結婚に対して対極的な姿勢をとらせ、その中間に主人公の Mirabell と彼の恋人である Millamant の二人を対置するという劇的構造をとっている。

Mirabell は、意中の女を獲得するためにいろいろな外的障害を克服しなければならない状況にある。この意味では、彼はプロットの推進力としての役割を果たしている。この際、その推進力の源泉となるのは何であろうか。それは周囲の人物たちを自分の都合のいいようにてなずけるという、世間の裏表に精通した功利的とも言える理知的エネルギーではなく、むしろその介入を許さない、その統御をかたく拒否する Millamant への愛情であろう。

しかし彼はこういう形の愛に強い反発を感じ、なんとかして理性を行動の原点に戻そうと、少くとも愛と理性の調和を計ろうと努力する。第一・二幕ではこの相対立する二つの力の板ばさみの状態の中に Mirabell を置き、結局愛に翻弄される姿を描写することによって喜劇性の確立がなされている。

だが Mirabell は第四章での Millamant との結婚契約を契機として、愛にもて遊ばれる男から巧妙な策略家としての本来の姿に立戻る。

本稿では、以上のような Mirabell のもつ喜劇的役割の二重性に視点をす

えて考察を行い、この劇の comedy of manners としての位置づけを試みてみたい。

I

劇中人物の行動がその性格によって規定されているという点から考えれば、この劇は性格喜劇の伝統の延長線上に位置づけることは困難な事ではないと言えよう。

事実、Congrere は人物たちの名前を性格と直結し、またその性格を行動に反映させている。例えば、Witwoud と Petulant の二人は、Millamant の“followers” (求愛者) として作者によって紹介されているが、Witwoud は“wit”を気取って笑いものになるし、Petulant は口論好きなタイプとして描かれている。また、Lady Wishfort によって Millamant への求婚を強制される田舎者の Sir Wilfull は酒の力を借用しなければ自分の意志を表明できない男としてひねった描写をされている。

ここで注目したいことは、これらの三名の男たちはいずれも「愛する男」の役柄を作者によって押付けられているということである。しかし、実際には、彼らをその役柄を表面上果たすだけであり、異性を愛の対象とするにはあまりにも不向きな人物として描出されている。

Witwoud は Millamant への感情は社交上の仮装に過ぎないと言い、彼女を愛することの無意味さを強調する。

And for my part—But it is almost a Fashion
to admire her, I shou’d—Hearkee—To tell you a
Secret, but let it go no further—Between Friends,
I shall never break my Heart for her.¹ (I. i. 466-
469)

一方 Petulant の方は酒の力を借りなければ Millamant へ求婚できないタイプであり、日頃彼が関心を寄せているのは“coquetry”を売物にする娼婦たちである。

次に、Sir Wilfull は“The Fashion’s a Fool.”(III. i. 538)とロンドンの社交生活の馬鹿馬鹿しさを皮肉っているが、お婆の Lady Wishfort に Millamant への求婚を強いられると、社交技術を完璧に身につけている Millamant によって、その田舎者特有の社交下手、無教養ぶりが徹底的にからかわれてしまう。

面白いことに、Sir Wilfull も Petulant 同様酒に酔ってはじめて求婚する男として描かれている。酒に酔わないと恋心の湧いてこないこの二人と、恋に酔ってしまった Mirabell との間には明らかな喜劇的コントラストがある。

Congreve は、本来愛とか結婚とかに深く係わりあいを持つ資格のない男たちを、全く異質な状況におきそこから笑いを創りだしているのである。彼らは愛する対象としてではなく笑いの対象として存在する意義があるといえよう。“…Besides sometimes to converse with Fools, is for my Health.”(II. i. 141-142)と言う Millamant の言葉がこのことを的確に代弁している。

次に、Mirabell の友人であり、彼の以前の愛人である Mrs. Fainall と結婚した Fainall の愛や結婚に対する姿勢を考察してみよう。

Fainall にとって、愛とはすぐ飽きのくるものであり、結婚とは愛の完結ではなく単なる社会的体裁であり、また墮落の出発点と見なされている。彼が愛することのできるのは女ではなく金であり富である。彼には妻がいるが、彼が必要としているのは妻ではなくその財産である。このことを熟知しているのは妻ではなく、皮肉なことに彼の愛人である Mrs. Marwood である。

Fainall. … And wherefore did I marry, but to
make lawful Prize of a rich Widow’s Wealth,
and squander it on Love and you?

Mrs. Marwood. Deceit and frivolous Pretence. (II.
i. 206-207)

Fainall のもつ金銭的欲望は単に主人公たちの愛情との喜劇的コントラ

ストとして存在するのではなく、やがて具体的な形をとって彼らの結婚の外的障害となってゆく。

Mirabell は Millamant との結婚を達成するために下男の Waitwell と Lady Wishfort の下女である Foible を強制的に結婚させる。Waitwell の結婚も Fainall の場合と同様、他の目的達成のための一手段であるという点では変わりはない。がしかし、Waitwell はこの強いられた結婚を快く受入れており反発はしていない。むしろ、一種の社会的遊戯として楽しんでいるといえよう。しかも、彼はこの遊戯性の中から Foible との愛を成長させ、やがては実質的な結婚を成立させるのである。この点で Waitwell と Fainall の二人は好対照を呈示している。

以上のように、Waitwell は例外として、Congreve の描く男たちは愛の軽視、結婚への否定的な姿勢という点で共通しているといえよう。

II

一方、女たちは愛を絶対的な感情としてとらえており、結婚は何ものにもまさる重要な価値を有するものであると考えている。

Foible と Millamant との下女である Mincing の二人を除き、他の女たちはみなそれぞれの形で Mirabell に対して愛情を抱いている(その質という面では必ずしも同一なものではないが)。

第二幕第一場において、Mrs. Fainall と Mrs. Marwood の二人は男たちへの激しい憎悪を口にし、男たちの愛情のあり方を痛切に批判している。

Mrs. Fainall. ... Men are ever in Extremes; either doting or averse. While they are Lovers, if they have Fire and Sense, their Jealousies are insupportable: And when they cease to Love, (we ought to think at least) they loath. (II. i. 3-6)

しかし、この二人は男たちへの憎しみを楯にして、おたがいの Mirabell への感情に探りを入れることも忘れてはいない。むしろ、この心の探りあ

いの方が、二人の対話の核となっていると言えよう。

Mrs. Marwood が結婚することによって、男たちへの憎しみをさらに絶対的なものにしたいと言うくだりから、二人の関心は Mirabell へと向けられてゆく。もちろん、二人は Mirabell への無関心を装うことに注意を払うことも忘れてはいない。

Mrs. Fainall. Ingenious Mischief! Wou'd thou wert married to Mirabell.

Mrs. Marwood. Wou'd I were.

Mrs. Fainall. You change Colour.

Mrs. Marwood. Because I hate him.

Mrs. Fainall. So do I; but I can hear him nam'd. But what Reason have you to hate him in particular?

Mrs. Marwood. I never lov'd him; he is, and always was insufferably proud.

Mrs. Fainall. By the Reason you give for your Aversion, one wou'd think it dissembl'd; for you have laid a Fault to his Charge, of which his Enemies must acquit him.

Mrs. Marwood. O then it seems you are one of his favourable Enemies. Methinks you look a little pale, and now you flush again. (II. i. 65-79)

二人の言っていることと意味していることには明確な相違があることをおたがいに承知している。Mirabell への愛は言葉でもってコントロールすることのできないものであり、言葉の領域を一気にのり越えて表面化する性質のものである、ということが二人によって確認されている。その確認は当然のこととして Mirabell をめぐるライバルとしての強烈な対抗意識を生みだしているのである。

Mrs. Fainall にとって Fainall との結婚は、Mirabell との情事を清算するためのやむをえない非常手段であった。しかし、彼女は結婚後も以前と変わらぬ感情を Mirabell に対して抱いており、心理のレベルでは彼の情婦であることに違いはなく、そのことに満足を感じている女である。それ故

に、彼女は Mirabell が結婚を達成するための道具となることを無条件に受入れるのである。彼女は Mirabell の道具となることに何の疑問も抱かず、むしろ彼のために自らの母である Lady Wishfort を裏切り罫にはめることが彼への愛の証であると信じている。

Mirabell が Waitwell をおじの Sir Rowland に変装させて Lady Wishfort と結婚させるという計画を漏らすと、Mrs. Fainall は積極的にその計画を評価する。そして二人の間にはその計画を罪の意識の伴わない社会的遊戯として楽しんでいこうという遊びの精神が満ち溢れている。

Mrs. Fainall. Well, I have an Opinion of your Success; for I believe my Lady will do any thing to get a Husband; and when she has this, which you have provided for her, I suppose she will submit to any thing to get rid of him.

Mirabell. Yes, I think the good Lady wou'd marry any Thing that resembl'd a Man, tho' 'twere no more than what a Butler cou'd pinch out of a Napkin. (II. i. 307-313)

John H. Smith はこの劇を“love-game comedy”と定義している²。その意味では Mirabell は巧妙な“love-game”の演出家であり、Mrs. Fainall は彼にとって献身的な援助者であり賛助者である。

このように自分の母親でさえ裏切り策略に陥れるゲームに興ずる彼女の行動の裏に認められるものは、盲目的な愛の一つのパターンである。

さて、Cleanth Brooks と Robert B. Heilman は、Mrs. Marwood の Mirabell への愛は“unrequited love”の一つの variation であると主張している³。

Mrs. Marwood は独身であり、Mirabell との結婚に対して激しい願望を抱く女であることはすでに明らかにされている。しかし、Mirabell は彼女に対して全く興味を持たず無関心である。決して報われることのない愛に限界を感じながらも、彼女は Mirabell と Millamant との間に介入し妨害することに執念を燃やす。彼女が Mirabell に対して抱く献意が愛情の裏

返しであることを敏感に察しているのは Fainall である。

And wherefore do you hate him? He is
Insensible, and your Resentment follows his
Neglect. An Instance? The Injuries you have done
him are a proof: Your interposing in his Love.
(II. i. 155-158)

女たちのうちで、恋愛や結婚に対して異常なまでの執着心を最もあらわにするのは Lady Wishfort であろう。

彼女は 55 歳のすでに女の盛りを過ぎたうば桜である。しかし、彼女は化粧を好み、今なお男心を魅惑するのに十分な魅力に満ち溢れていると過信する女である。そんな彼女であるので、彼女は周囲のもの笑いの対象となっている。実の娘である Mrs. Fainall は母の姿に女の弱さを知り、それを苦笑う。

Female Frailty! We must all come to it, if we
live to be Old and feel the craving of a false
Appetite when the true is decay'd. (II. i. 314-316)

Sir Rowland に姿を変えて彼女に求婚した Waitwell の目には、彼女は男の官能的欲望を満たす対象としてさえ写ることはない。“O, she is the Antidote to desire.”(IV. i. 560)と Foible に説明している。

彼女はその名(wish for it)が示すように、下半身のレベルで男を欲するタイプである。Fainall が結婚を金銭的欲望を満たすための手段と考えているように、彼女の方も結婚を性的欲求を充足させるための便宜だととらえている。結婚を下半身の問題とする彼女にとって相手は男であればよいのである。だから、彼女は男に対して警戒線を張りめぐらすことを好まない。彼女が Mirabell の仕組む恋愛戦術にいともしずにはまってしまうのも当然なことであろう。

しかしながら、彼女が男たちに望む愛の形は非常に“romantic”なものである。第四幕の第一場において、Sir Rowland に変装した Waitwell は Mirabell が自分の命を狙っているという理由で、Lady Wishfort へ性急

な求婚をする（無論これは結婚できるのであれば一日でも早い方がよいと考えている彼女の心のうちをみすかしてのことであるが）。

それに対し、彼女は、Mirabellのことを“a perfidious wretch”と罵りながら、彼が自分に対して行った求愛の場面を再現してみせる。

O Sir Rowland, the hours that he has dy'd
away at my Feet, the Tears that he has shed, the
Oaths that he has sworn, the Palpitations that he
has felt… the Pangs and the Pathetic Regards of
his protesting Eyes! Oh no memory can Register.
(IV. i. 511-517)

Mirabellの偽善や不誠実さを強調するつもりで始めたつもりが、いつのまにか自分の発する恋の言葉のカタログに自己陶醉してしまっていることが察せられる。自らの空想力ででっちあげた虚像に酔いしれているのか、あるいは過去においてMirabellの行った事実にもとづいているのかはこの場合それほど問題にならない。重要なことは、彼女が“romantic love”の熱狂的な信者であり、それを身をもって体験する資格が自分にはまだ十分にあるという強い意識を持っているということであろう。

しかし、Mirabellの愛がそうであったように“Sir Rowland”の求婚もMirabellの策略にすぎなかったということが、Mrs. Mavwoodによって知らされると、Lady Wishfortはロンドン社交界からの逃避を真剣に考え、愛の挫折者として自分をイメージ化することに没頭する。

… Well Friend, you are enough to reconcile me
to the bad World, or else I wou'd retire to Desarts
and Solitudes; and feed hermless Sheep by Groves
and Purling Streams. Dear Marwood, let us leave
the World, and retire by our selves and be
Shepherdesses. (V. i. 131-135)

深い絶望感と平行してあくまで自分を“romntic”な存在として描こうとする彼女の自己欺瞞性が姿を現わしている。彼女は自分で作りあげた虚像と密着してしまっていて、それが実像との間にとりかえしのつかない隔

りを生んでいるのである。従って彼女は虚像の世界に生きるしかなく、“romantic lover”という一つの極端から“Shepherdess”という別の極端に飛躍せざるをえないのである⁴。Mrs. Fainall は “Men are ever in extremes.”(II. i 3)と厳しく男たちを批判していたが、同様に “Women are ever in extremes.”と言うことが Lady Witwoud にもあてはまると考えられよう。そして“romantic lover”の役柄を棄て去り“shepherdess”という新しい役柄に徹したいと言う彼女の言葉は、愛とか結婚とかいうものを絶対化している姿勢の裏と表に過ぎず、その極端さを Congreve は笑っているのである。

III

以上の考察を根底にして、Congreve の作出する男たちは (Waitwell を除いて) 愛や結婚を否定的に眺めており、逆に女たちは (Foible を例外として) 愛を絶対化し結婚に対して異常な執着を抱いているといえよう。愛と結婚に対するこの両極端の姿勢が、彼らを真実の愛や結婚から隔絶した存在へと追いやっていくと考えられよう。彼らのこのような姿を浮彫にすることによって、Congreve は王制復古期のロンドンの上流社会の “affectation,” “vice,” “coquetry,”そして “hypocrisy” の馬鹿馬鹿しさを笑いそして揶揄しているのである。

このように愛と結婚に対して極端な態度を示す人びとの間にあって、主人公の Mirabell は Millamant への愛を結婚という形で完成させるべく、いろんな外的及び内的障害に立向い克服してゆくのである。

さて、Mirabell の人柄については多くの批評家たちによって多種多様な見解と評価が下されているのが偽らざる実情である。

それらは概ね次の三つの解決と評価にしぼることができると考えられる。即ち、Mirabell を Millamant 同様 “wit” と “virtue” をかねそろえた “exemplary lover” とする解釈、愛によって “moral reformation” を達成

するタイプとする解釈、そして Mirabell をモラルの枠外においてとらえようとする解釈である。これらの解釈を順を追って考察しつつ、Mirabell の “comic role” (喜劇的役割) について検討を加えてみよう。

まず、Marlies K. Danziger と W. Stancy Johnson は Mirabell と Millamant の二人を他の人物たちと比較してこう述べている。

In contrast to all these, the heroine and the hero, Millamant and Mirabell, clearly represent the values of good sense, personal honor, the capacity for love (though they would die rather than admit it in public), and a realistic view of marriage, brilliantly revealed by the famous compact-scene in which they set forth in turn the conditions under which each would be willing to marry.⁴

確かに、Mirabell を他の人物たちから切り離し、笑いの対象としてではなく称場の対象として理解することはこの劇の喜劇としての安定性の確立のためには魅力ある解釈と言えよう。

しかし、この解釈の方法は Congreve の真に意図する Mirabell 像からはあまりにかけはなれたものと言えよう。なぜなら、Congreve は Mirabell を単に賞讃すべき人物として淡泊に描出しているのではなく、むしろ他の人物たちからの激しい批難や罵倒の対象、あるいは揶揄の対象として現出しているのであり、そこがこの劇の面白さになっているのである。

例えば、Lady Wishfort は Mirabell に対し強い不信感と憎悪を抱いていて “Slander-mouthed railer,” “that wheedling villain,”あるいは“O, he carries poison in his tongue that corrupt integrity itself”と罵倒しているが、Mirabell の罫にはまり結婚への夢を絶たれた彼女としては当然なことと言えよう。このように、いかに主人公と言えど、単純に“exemplary lorer”として描出することの危険性をCongreve という劇作家は十分に承知していたのである。

次に Martin S. Day は、将来結婚することによって Mirabell は本能的欲望を“tamable”な状態へもってゆけるんだとその可能性を強調してい

る。

Congreve and his intelligent pair realize the absurdity of contemplating their union as the romantic heroes and heroines of Shakespeare do theirs. They must accept the realities of the current world. While Millamant has always been chaste, Mirabell has been a rake, but as a more cerebral Dorimant, he shall in the future direct his natural desires within the socially necessary form of marriage.⁵

また、Pralay Kumar Debも Mirabellが Millamantとの接触によって道徳的再生をなしとげる点を強調して次のように言及している。

Mirabell has a prodigal past; time was when he fell in love with Mrs. Fainall and being apprehensive of a possible biological consequence of their intimacy married her off to Fainall. But he undergoes a moral change and becomes a symbol of virtuous action by coming in contact with Millamant who upholds the principles of honour and decency.⁶

同様に Donald Bruceも Mirabellを理想化する態度をとらず、Millamantによる Mirabellの知的不毛性からの救出が彼の道徳的再生につながるという見解を呈示している。

The moral aspect of the play is to be seen in the way that the modish but dissolute Mirabell is presented not as admirable in himself as he stands, but as hitherto wasted intelligence ready for reclamation.⁷

Day, Deb,そして Bruce三名の解釈は Mirabellをありのままの姿で直視し、その上で理解の対象と見なすという点では妥当な説得力を有していると言えよう。無論、彼らが Mirabellに示す寛容な態度はあくまで彼の道徳的再生を条件にしているという点をその根拠としていることは言うまでもない。

一方、Cleanth Brooks と Robert B. Heilman は Mirabell に対してより厳しい姿勢を示し、彼を“Restoration rake”から“reformed rake”へと発展成長してゆく人物として見てはいない。

Congreve, for instance, does not divide his characters into heroes and villains... He does not present Mirabell as a flawless hero; instead he shows Mirabell very emphatically in “the way of the world” in his not only having had an affair with Millamant’s cousin but also having married her off to the unpalatable Fainall as a coverup; Congreve neither conceals these facts nor attempts to present Mirabell, in his new love for Millamant, as a changed man or “converted” man.⁸

Mirabell の行為は表面上は“immoral”な印象をぬぐえないが、それは実はより鮮明に彼のもつ人間の魅力を引き出すための伏線であるとし、彼のもつ深い「洞察力」を積極的に肯定している。その一例として、彼が Mrs. Fainall に Fainall との結婚を強いたことに関して次のように述べている。

If he did marry Arabella to Fainall, he at least also took measures to protect her against Fainall; we see his forcefulness and his essential trust-worthiness in the fact that she adopts his plan.⁹

つまりここで言われていることは、万がいち Fainall が彼女の財産を自分のものにしようと思っただにしても、それは心配するに値しない。なぜなら、その財産は彼女がまだ未亡人であった頃既に Mirabell 名義のものになっているからであり、彼女がそのことに何の疑問も抱くことなく同意したということは、彼が信頼するにふさわしい人物であることを証明している、と Brooks と Heilman は言いたいのだ。

しかし、ここで果して Mirabell と Mrs. Fainall の間にある信頼関係というものは本物と言えるだろうか、という疑問が起こる。

つまり、Mirabell がそれ程までにして彼女の結婚後のことを気づかって

いたのであれば、なぜ彼自身が彼女と結婚しなかったのか、それこそが真の意味での信頼関係ではないのか。

第二幕で Mrs. Fainall は “Why did you make me marry this Man?” (i. 263-264) と Mirabell に対して不満をもらす。それについて Mirabell は長ながと説明をする。

Why do we daily commit disagreeable and dangerous Actions? To save that Idol Reputation. If the familiarities of our Loves had produc'd that Consequence, of which you were apprehensive, where could you have fix'd a Father's Name with Credit, but on a Husband? I knew Fainall to be a Man lavish of his Morals, an interested and professing Friend, a false and a designing Lover; yet one whose Wit and outward fair Behaviour have gain'd a Reputation with the Town, enough to make that Woman stand excus'd, who has suffer'd herself to be won by his Addresses. A better Man ought not to have been sacrific'd to the Occasion; a worse had not answer'd to the Purpose. When you are weary of him, you know your Remedy. (II. i. 265-277)

「あの場合、あなたと結婚するのにふさわしい男は Fainall をおいてほかにいなかった。だから自分は身を引かざるをえなかった」、と Mirabell は説明しているが、これは体のいい自己弁護であり詭弁としかいいようがないのではないだろうか。彼のこの言葉を聞いて Mrs. Fainall は一応納得するが、これも明らかに常識的なレベルでの「モラル」にかけたいいかげんな性質のものでしかない。いいかげんな弁解をする Mirabell と安易に彼の口車に乗る Mrs. Fainall の関係は信頼に根ざしたものであると考えるより、むしろ単なる心理的愛人関係だと言えよう。

従って Mirabell を「必要上偽善の仮面をかぶらざるを得ないが、実は深い洞察力を有した魅力ある男」という Brooks と Heilman の主張は妥当性を欠く誤解の上に成り立っていると言えよう。

さて次に、Ian Donaldson は Congreve の喜劇は道徳性という面では曖昧な傾向が見られるとし、Mirabell の評価を「モラル」を越えたレベルで理解することを強調している。

Mirabell is victorious at the end of the play not because of any particular moral qualities he may have, but rather because he is a better lawyer than Fainall, and has made sure that his threats and his bargains are legally enforceable.¹⁰

このように、Mirabell を「モラル」から切り離して一つまり極言すれば“amoral”なレベルで一とらえようとする Donaldson の態度は今まであげた批評家たちとくらべ、より説得性のあるものだと言えよう。なぜなら、Congreve 自身が Mirabell と Mrs. Fainall の関係にみられるように「モラル」に関しては曖昧でいい加減な姿勢をのぞかせているからである。

それ故に、「財産相続にからむ法律上のかけ引きに精通した男」、として Mirabell を理解した方がより妥当であろう。このことについてはあとで更に考察を深めてみたい。

さて、Mirabell にとって最も重大な問題は「モラル」の問題ではなく、Millamant を愛しているということであり、彼女との結婚を彼らしい形で真剣に考えているということである。

John Harrington Smith はこういう事態に陥っている Mirabell を純粹に心理の面から考察している点でユニークと言えるだろう。

He has put away Mrs. Fainall, and is too much in love with Millamant to think of Marwood, or any other woman whatever. Nevertheless, Congreve does not ask us to give him special credit for these reforms. Mirabell is not constant to Millamant because constancy is an ideal to which young gentlemen ought to conform, but because he is in love and cannot help himself.¹¹

Smith はこのように Millamant への愛の虜となった Mirabell を彼の真の姿として解釈しておりこのことに対しては誰も異論はないであろう。

では、彼の愛はどのような形で現われているのかを考察してみよう。第一幕で Mirabell は Fainall と次のようなやりとりを行う。

Fainall. For a passionate Lover, methinks you are a Man somewhat too discerning in the Failings of your Mistress.

Mirabell. And for a discerning Man, somewhat too passionate a Lover; for I like her with all her Faults; nay, like her for her Faults. Her Follies are so natural, or so artful, that they become her; and those Affectations which in another Woman wou'd be odious, serve but to make her more agreeable. (I. i. 156-163)

これは表面的には軽妙で“wit”に富んだ言葉のゲームであるが、内面にはそれ以上の意味を含蓄している。即ち、Mirabell がここで行っていることは単なる愛の告白だけではなく、愛にのめり込んでいる自分の心理の分析であり、またそういう心理状態に陥ってしまいどうしようもなくなった自分を（彼女の欠点とともに）苦笑っているのである。

一方、Millamant は Mirabell に対して好意以上の情感を胸に秘めているが、彼女は慎重であり軽がるしくその思いを口にするのを自重している。また、彼女は今までの Mirabell の愛の遍歴に対して十分に知識を得ており、当然なことにそれを批判的に見ている。それ故に安易に彼の愛を受入れることを拒否している。

こういう状態にあるので、彼女は自らの本心を Mirabell に明らかにすることを好まず、むしろ彼の恋心を揶揄し翻弄することを楽しむ残酷な女を演技することに徹するのである。

第二幕において、Mirabell が前夜 Millamant が自分を無視しないがしろにしたことを責める場面で次のようなやりとりが交わされる。

Millamant. Mirabell, Did not you take Exceptions last Night? O ay, and went away— Now I think on't I'm angry— No, now I think on't I'm pleas'd— For I believe I gave you some Pain.

Mirabell. Do's that please you?

Millamant. Infinitely; I love to give Pain.

Mirabell. You wou'd affect a Cruelty which is not in your Nature; your true vanity is in the power of pleasing.

Millamant. O I ask your Pardon for that— One's Cruelty is one's Power, and when one parts with one's Cruelty, one parts with one's Power; and when one has parted with that, I fancy one's Old and Ugly. (II. i. 377-388)

ここには男をいためつけることを得意とする Millamant の気取りが表面化しているが、それが彼女の本来の姿ではないことを Mirabell は知っている。しかし彼女は Mirabell に対する 揶揄を簡単には停止しない。Kenneth Muir は彼女を評して次のような説得性のある発言を行っている。

Millamant's wit, like that of Rosalind and Beatrice, is a sign of intelligence; and although affectation and coquetry usually indicate a frigid temperament, Millamant's affectation is the cloak of affection, and her coquetry conceals a nature capable of a whole-hearted love.¹²

彼女は Mirabell が自分に対し 夢中であることを見すかしており、感情を表情にあらわに出す彼の無器用さを笑い、それでは自分への求愛に挑戦するようにと要求する。

Millamant. ... Well, I won't have you Mirabell— I'm resolved— I think— You may go— Ha, ha, ha. What wou'd you give, that you cou'd help loving me?

Mirabell. I would give something that you did not know, I cou'd not help it.

Millamant. Come, don't look grave then. Well, what do you say to me?

Mirabell. I say that a Man may as soon make a Friend by his Wit, or a Fortune by his Honesty, as win a Woman with plain Dealing and Sincerity.

Millamant. Sententious Mirabell! Prithee don't
look with that violent and inflexible wise
Face, like Solomon at the dividing of the
Child in an old Tapestry-hanging.

Mirabell. You are merry, Madam, but I wou'd
perswade you for one Moment to be serious.
(I. i. 456-471)

Mirabellが真面目になろうとすればするほど、彼女はからかいに徹し、陽気なたわむれに(かなり作為的ではあるが)終始している。彼女は“sincerity”を看板に掲げる Mirabell が、実は裏では Waitwell と Foible を結婚させ、その Witwoud を Sir Rowland に変装させ Lady Wishfort に求婚させようと企んでいることを知っている。そんな彼の二人に対して寛大であることを彼女はよしとしないのである。だから彼に対するからかいは単なる気取りによるものではなく、むしろ彼に裏表なく真剣になって欲しいとの間接的要請であり、それはとりもなおさず彼女らしい愛情の表現なのである。

しかし、Mirabell には彼女のこのような真情をくみとる余裕は全くないのであり、彼女を“Whirlwind”に較べて批判するのである。

I have something more— Gone— Think of you!
To think of a Whirlwind, tho' 'twere in a
Whirlwind, were a Case of more steady Contem-
plation; a very tranquility of Mind and Mansion...
To know this, and yet continue to be in Love, is
to be made wise from the Dictates of Reason, and
yet persevere to play the Fool by the force of
Instinct— O here come my pair of Turtles— What,
billing so sweetly! Is not Valentine's Day over
with you yet? (II. i. 490-503)

一筋なわでは丸め込む訳にはいかない彼女の気まぐれに振り回されている自分を、Mirabell はみじめな思いで観察しており、また理性で統御することのできない彼女への激しい愛に翻弄されている自分を苦笑っているのである。

Brooks と Heilman はこのような Mirabell のことを“rather studiously critical lover”と指摘しているのが至言であろう¹³。Mirabell にとっては愛という感情は理性の力でもってコントロールできる性質のものであった。いや、むしろ今までの彼は、理性の統制の枠内からはみ出した形の愛の介入を断じて許さなかった、と言った方が妥当であろう。そのよい例が、Mrs. Fainall への愛（もしこれが愛と呼べるものであれば）であった。そして彼は自分の都合でその愛を放棄した。

しかし、Millamant への愛は全く新しいタイプのものであり、理性の介入を頑固に拒絶する性質のものであり、そのために彼は愛と理性の相反する二つの力の板ばさみになり、そこに生ずるどうしようもない心理的不協和音の処理に苦慮しているのである。彼の魂の奥底に潜むこの喜劇的葛藤こそ、この劇の本質につながるものなので、それがこの劇の面白味をかもし出しているのである。Congreve は恋愛を一種の社会的遊戯と見なしていた男が、突然に愛に陥り感傷家へと急変する不自然さそして滑稽さを、幾分“irony”を含めて笑っているのである。次の Millamant の Mirabell への笑いはそのまま作者の意図する笑いとして受け取って構わないであろう。

O silly! Ha, ha, ha. I cou'd laugh immoderately. Poor Mirabell! his Constancy to me has quite destroy'd his Complaisance for all the World beside. I swear, I never enjoin'd it him, to be so coy—If I had the Vanity to think he wou'd obey me; I wou'd command him to shew more Gallantry. (III. i. 335-344)

さて、Congreve はこのように全く余裕のない Mirabell と遊びの精神に満ち溢れている Millamant をどういう形で結婚へ導いてゆくのであろうか。表面上は全く対照的とも言える二人のとるべき道は一つであり、それは結婚を個性を圧殺する男と女の営む個人生活としてではなく合意の上に成立する一つの契約としてとらえることである。

第四幕において（いわゆる“the contract scene”である）、二人は結婚

生活の上で不可決で重要な要素と、とるに足らない“trivial”な要素とを混合してお互いの条件として出しあい契約結婚の約束を交しあう。二人はお互いに対して直接的な表現を用いることを好まず、言葉に機智に富んだひねりを入れることを好む。ひねりの効いた言葉の裏に隠された愛情を無言の内に確認しあう方が、二人にとって、最も適した方法なのである。

Millamant. ... These Articles subscrib'd, If I continue to endure you a little longer, I may by degrees dwindle into a Wife.

Mirabell. Your bill of fare is something advanc'd in this latter account. Well, have I Liberty to offer Conditions— that when you are dwindl'd into a Wife, I may not be beyond Measure enlarg'd into a Husband?

Millamant. You have free leave; propose your utmost, speak and spare not. (IV. i. 225-233)

これを契機として、Mirabellの内的障害となっている愛と理性の奏でる心理的不協和音は克服される。ここで注意しなければならないことは、二人が結婚の契約をとり交すにあたって、周囲の人々の思惑を全く無視した形であくまで二人の個人的問題としてとらえ、契約に合意するということである。別の言い方をすれば、Mirabellは外的障害を打開することなく契約に踏み切ってしまった、とすることである。

Mirabellは、今後の結婚生活が安定した形で成立するためには堅固な財政的基盤なしでは不可能であるという現実的な結婚観を持っている。具体的に言えば、Millamantの財産なしでは二人の結婚生活は決して成り立つことはない、と彼は考えているのである。

彼女の財産を二人のものとするためには、Lady Wishfortの合意が必要であり、またそれを狙っているFainallとの対決で勝利を収める必要があるのだ。

“Well, if Mirabell shou'd not make a good Husband, I am a lost thing; — for I find I love him violently,” (IV. i. 315-316)と、

結婚に対する不安と Mirabell への愛にジレンマを感じている Millamant を尻目に、Mirabell は彼の本領を発揮できる「かけ引き」合戦に全力をあげて臨むのである。契約後の Millamant の不安定な精神状態と Mirabell の水を得た魚のような活力に満ちあふれた精神とは、この劇の後半の重要な喜劇的コントラストであろう。

さて、第三幕で Mrs. Marwood は Fainall に、Mrs. Fainall が過去において Mirabell の愛人であったこと、また現在も彼に好意的で裏で実際の協力 (Mirabell と Millamant の結婚に関する) をしていることを知らせる。当然ながら、Fainall は激しく嫉妬し怒り狂う。そこで Mrs. Marwood は彼に Mrs. Fainall の過去を種にして Lady Wishfort を脅迫し、Mrs. Fainall と Millamant の全財産を獲得するよう唆す。

Discover to my Lady your Wife's conduct;
threaten to part with her—My Lady loves her and
will come to any Composition to save her
reputation, take the opportunity of breaking it, just
upon the discovery of this imposture. My Lady
will be enraged beyond bounds, and Sacrifice
Neice, and Fortune, and all at that Conjunction.
(III. i. 659-665)

もちろん Fainall がこの話に乗らない筈はない。彼は即この計画を実行に移す。彼は Lady Wishfort に対して財産を要求するだけではあきたらず、もし彼女が例の結婚への執着から将来において結婚すると不利だと考え、許可なしで結婚することを固く禁ずる念の入れようである。

Lady Wishfort が、このような苦境に立たされている間に、Mirabell と Millamant は Sir Wilfull をその協力者にし、Lady Wishfort の苦境そしてまた二人の難局を打開すべく一芝居打つ。

まず、Sir Wilfull が Millamant との結婚の約束を結んだと言い、その証人として Mirabell が来ていると説明する。Millamant の方も彼に話を合わせ、Mirabell との契約は破棄した旨をつげる。その後 Mirabell が次のように反省の意を表し、Lady Wishfort の許しを乞う。

Consider Madam, in reality; You cou'd not recieve much prejudice; it was an Innocent device; tho' I confess it had a Face of guiltiness,—it was at most an Artifice which Love Contriv'd—and errors which Love produces have ever been accounted Venial. At least think it is Punishment enough, that I have lost what in my heart I hold most dear, that to your cruel Indignation, I have offer'd up this Beauty, and with her my peace and Quiet; Nay all my hopes of future Comfort. (V. i. 383-391)

ここでの Mirabell の謝罪のやり方は大変興味深いものがある。なぜなら、Lady Wishfort を策略の罠におとし入れたのは、Mirabell 自身というよりはむしろ Millamant へのどうしようもない愛だと弁解しており、愛にかかわること故にその策略はたわいのないものとして受け流すべき性質のものだと婉曲的に強調していると思われるからである。

さらにいくら演技だとは言え、Millamant のことを断念するというくだりは、いかにも派手で作為的な印象を受けざるをえない。以上のことを考えると、Mirabell は謝罪すべき立場にありながら、謝罪そのものより、謝罪を演じている自分を楽しんでいるように思われる。つまり、自分の演技力が一体どこまで通用するかということに挑戦してその過程を味わい鑑賞しているように思われるのである。表面的には、改心の仮面をかぶっているが、その裏にあるのは恋愛のかけ引きに精通し Mrs. Fainall をそして Lady Wishfort を口説いている時の彼本来の姿ではないだろうか。少くとも彼は臨機応変に Millamant を愛している自分と彼女以外の女を愛している時の自分との間を自由に往来することのできる男だと考えられる。そしてこのことは結局、「モラル」の問題ではなく、遊戯性に力点をおいている Congreve の劇作態度によるものだと理解できよう。

同様なことは、Mirabell と Fainall の「策略競合」においても言えるであろう。Mirabell は Fainall と Mrs. Morwood の愛人関係を明らかにして Mrs. Fainall の“reputation”を守ってやり、また彼女の財産は彼女が

未亡人の頃既に彼名義にしてあったので安全であり、Fainall の金銭欲の対象とはなりえないのだ。

Yes, sir. I say that this lady while a widow, having it seems receiv'd some Cautions respecting your Inconstancy and Tyranny of Temper, which from her own partial Opinion and fondness of you, she cou'd never have suspected—she did I say by the wholesome advice of Friends and of Sages learned in the Law of this Land, deliver this same as her Act and Deed to me in trust, and to the uses within mention'd. You may read if you please—(holding out the Parchment.) tho perhaps what is inscrib'd on the back may serve your occasions. (V. i. 540-549)

こうして、Mirabell は「策略競合」において Fainall を打倒し、その報酬として Millamant と彼女の財産を手中にするのである。

以上考察したように、第五章において Mirabell は“reputation”と財産争奪に絡んだ難局に臨み、臨機応変に問題に対処してきばきとそれらを解決してゆく。そこには、Millamant への愛に抵抗する術もなくいいように翻弄されていた感傷家としての姿はない。むしろ機を見るに敏な彼本来の「策略家」としての実像が浮彫にされていると言えよう。そして彼の持つこの部分は Millamant の愛によって大きな変化を起こすのではなく、むしろ彼独自の不変の領域として結婚後も存在するであろう。つまり結婚という男と女の共同生活の中にあっても彼が彼自身として存在するための不可欠な部分なのである。

結びとして、第一・二幕で Mirabell の果たす喜劇的役割は、Millamant への愛と理性との内的葛藤を十分意識していながら、結局はずるずると愛に翻弄されてゆく自分を観察し苦笑うことであり、Millamant の執拗な揶揄攻勢の前に余裕のない滑稽な姿を露呈することである。

しかし、第四幕の“the contract scene”を契機として、彼の内部の不協和音は一掃され愛と理性の調和が確立される。第五幕においては、本来

の「策略家」としての本領を發揮し外的障害を打開し、Millamant への愛の証明を、そして結婚後も保障されねばならない彼独自の領域の確認を行うことである。

NOTES

1. *The Complete Works of William Congreve*, ed. Herbert Davis (Chicago & London, 1967)— hereafter cited as Works.
2. John Harrington Smith, *The Gay Couple in Restoration Comedy* (Cambridge, Mass., 1948), p. 186.
3. Cleanth Brooks and Robert B. Heilman, *Understanding Drama: Twelve Plays* (New York, 1945), p. 445.
4. *Loc. cit.*
5. Marlies K. Danziger and W. Stancy Johnson, *An Introduction to Literary Criticism* (Boston, 1961), p. 106.
6. Martin S. Day, *History of English Literature 1660-1837* (New York, 1963), p. 28.
7. Pralay Kumar Deb, *Jonson and Congreve: A Study of Their Comedies* (Calcutta, 1976), p. 28.
8. Donald Bruce, *Topics of Restoration Comedy* (London, 1974), p. 81.
9. Brooks and Heilman, p. 443.
10. *Ibid.*, p. 449.
11. Ian Donaldson, *The World Upside-Down: Comedy from Jonson to Fielding* (London, 1970), pp. 146-147.
12. Smith. p. 186.
13. Kenneth Muir, "The Comedies of William Congreve," *Restoration Theatre*, eds. John R. Brown and Bernard Harris, Stratford-upon-Avon Studies 6 (London, 1965), p. 232.
14. Brooks and Heilman, p. 399.

BIBLIOGRAPHY

- Brooks, Cleanth and Robert B. Heilman. *Understanding Drama: Twelve Plays*. New York: Holt, Rinehart and Winston, Inc., 1945.
- Bruce, Donald. *Topics of Restoration Comedy*. London: Victor Gollance Ltd., 1974.
- Danziger, Marlies K. and W. Stancy Johnson. *An Introduction to Literary Criticism*. Boston: D. C. Heath and Company, 1961.
- Davis, Herbert, ed. *The Complete Plays of William Congreve*. Chicago and London: The University of Chicago Press, 1967.
- Day, Martin S. *History of English Literature: 1660-1837*. New York: Doubleday & Company, 1963.
- Deb, Pralay Kumar. *Jonson and Congreve: A Study of Their Comedies*. Calcutta: Progressive Publishers, 1976.
- Dobree, Bonamy. *Restoration Comedy: 1660-1720*. Oxford: Clarendon Press, 1924.
- . *William Congreve*. London: Longman, Green, & Co., Ltd., 1963.
- Donaldson, Ian. *The World Upside-Down: Comedy from Jonson to Fielding*. London: Oxford University Press, 1970.
- Hodges, John C. *William Congreve the Man*. New York: The Modern Language Association of America, 1941.
- Hume, Robert D. *The Development of English Drama into the Late Seventeenth Century: 1642-1780*. London: Oxford University Press, 1976.

- Krutch, Joseph Wood. *Comedy and Conscience after the Restoration*. New York and London: Columbia University Press, 1924.
- Lynch, Kathleen M. *The Social Mode of Restoration Comedy*. "University of Michigan Publications, Language and Literature," 3. New York: The Macmillan Co., 1926.
- Muir, Kenneth "The Comedies of William Congreve," *Restoration Theatre*. ed. by John R. Brown and Bernard Harris. Stratford-upon-Avon Studies 6. London: Edward Arnold (Publishers) Ltd., 1965.
- Nettleton, George Henry. *English Drama of the Restoration and Eighteen Century: 1642-1780*. New York: Cooper Square Publishers, Inc., 1932.
- Perry, Henry Ten Eyck. *The Comic Spirit in Restoration Drama*. New Haven: Yale University Press, 1925, reissued by Russell & Russell, Inc., New York, 1962.
- Smith, John Harrington. *The Gay Couple in Restoration Comedy*. Cambridge, Mass: Harvard University Press, 1948.
- Wilson, John Harold. *The Influence of Beaumont and Fletcher on Restoration Drama*. Columbus: The Ohio State University Press, 1928,